笑顔と涙のダンスコラボ

障がいを持つ子どもたちが甲南大チアと共にハーフタイムショー

7月2日、甲南大学グラウンドで行われた甲南大対京都産業大の交流戦のハーフタイムで、甲南大チアリーダーと障がいを持つ子どもたちが共同ダンスパフォーマンスを披露した。

このコラボレーションは、法政大1997年度主将で、現在、健常者と障がいを持つ方々との交流の場を設ける活動を行っている基幸二さんが橋渡し役になった。

「以前からスポーツでの社会貢献とは何かを考えてきました。いくつかの社会福祉センターに足を運んだ際に、障がいを持つ子どもたちがダンスに取り組んでいることを知りました。発表する場がほとんどないという話を聞き、フットボールのハーフタイムショーでその場を提供できないかと思いつきました」

基さんは以前、コーチをしていたことがある甲南大に相談し、今回のコラボレーションが実現した。

最初にパフォーマンスを披露した甲南大チアリーダーが作った花道を通ってフィールドに登場した社会福祉施設『あおぞら』（兵庫県伊丹市）の子どもたちは、青空の下で懸命にダンスを披露。その姿に甲南大、京都産業大の選手たち、そして観客が皆で手拍子を贈る、温かい雰囲気に包まれた。

パフォーマンス終了後は、試合観戦に来ていた両チームの選手の保護者たちが自然発生的に花道を作って、子どもたちを大きな拍手と共に送り出した。

子どもたちの中には、観客の反応に感動の涙を流す者もいた。

甲南大主将DL中田圭亮（4年）は、これまでにない交流と経験が出来たようだ。

「このような機会をいただけたこと感謝しています。イベントの話を頂いた時に、どのように対応するか色々と考えましたが、いつもの自分達として迎えることを決めました。元気に笑顔で、楽しそうに踊っている『あおぞら』の皆の姿を見て、逆に勇気をもらいました」

甲南大の砂川敏樹HCは、自分たちが気付いていなかったチームの価値を教えられたと言う。

「今まで社会貢献・地域貢献として様々な活動を行ってきましたが、今回のイベントは我々がチームとして存在している意味を強く感じさせてくれるものでした。部員が積極的に参加する姿や甲南大チアのご協力、そして何より『あおぞら』の子ども達が一生懸命踊っている姿を見て沢山の感動を頂きました。今後もチームとして、何ができるかを選手達と考え、実現していきたいと思います」

来るべきシーズンに向け、レッドギャングは『あおぞら』の子どもたちから、大きなエールをもらった。